

大学等名	東海大学福岡短期大学
テーマ名	テーマ6:ニーズに基づく人材育成を目指した e-Learning Program の開発
取組名称	学びの自由化と個別教育の推進 - 近未来コミュニティカレッジのための e-Learning の開発及び展開 -
取組学部等	全学
取組担当者	学長 高橋 守人
取組期間	平成17年度～平成18年度
Webサイト	http://www.pub.ftokai-u.ac.jp/itcenter/?%B8%BD%C2%E5GP

取組の概要

本学の基本方針「学びの自由化と個別教育」を展開する中で、学びの自由化を推進するためには{誰でも}{いつでも}{どこでも}{生涯}学ぶことのできる学習環境が必要であり、情報環境の整備と共に良質な e-Learning 教材など学習資源の開発・蓄積が前提となる。この前提の実現によって、年齢、国籍、学習歴、学力レベル、入学目的など多様な学習者一人ひとりへの適切な履修・学習・進路指導、すなわち個別教育の可能性も拡大する。本取組は、これまでの実績{組織整備、32科目の e-Learning 教材の開発、SRMS(学生カルテ)及び授業評価システムの開発運用、「30単位までの e-Learning 履修可」導入など}を基盤にして、地域総合型短大に必要な基礎的教養・スキル・専門等の50正規開講科目の e-Learning 教材(マルチストーリー化やユニバーサルデザイン化も含む)の改良・開発を行うと共に、学生カルテ運用のもとでの、洗練された e-Learning Program の展開に取組むものである。

実施の経緯・過程

本取組は、ただ単に授業科目の Web 教材化とその利用ではなく、本学の教育の基本方針「学びの自由化と個別教育」及びこれまでの教育への IT の活用に関する実績に基づいて行った。具体的には、基礎的な教養・スキル及び実務的知識・技術等の良質な e-Learning 教材(マルチストーリー・ユニバーサル化を含む)の開発作成及び本学が独自に開発した「学生カルテを中心とする SRMS」及び「オンライン授業評価システム」等を e-Learning に組み込み併用することによって、通常の教室での一斉授業では不十分であった多様な学習者一人ひとりに応じたきめ細かい教育を展開し、初期高等教育(あるいはキャリア形成教育)の効果及び質的向上を目指した。

その中心である学生カルテには、学生生活指導、就職・編入指導、学習指導など学生指導に関する様々な事象が書き込まれており、これらの情報を蓄積し、リアルタイムに共有できるシステムを構築・運用した。また、1授業時間毎に授業評価(教授法評価、学生理解度の自己評価などの項目)のできるリアルタイム授業評価システムも運用して、学生の主観的授業評価結果を取得し、授業改善の一助とした。これらのさまざまな情報がデータベースとして蓄積されている。これらの情報は各種指導を通じて学生にフィードバックされ、メンタリング時などのよりきめの細かい指導に役立った。一方で教員は、蓄積された情報を参考に、e-Learning 教材や Web 上に構築された授業資料、あるいは教授法そのものを、その授業の受講生に対して随時、最適化するのに役立てることができた。e-Learning では、学生と教員が接する時間が少なくなり、その学生の学習状況、他の教員が担当する授業における指導状況や学習状況などがわかり難く、洗練された教育を実現しにくい面がある。これに対して SRMS を運用すれば、各教員の e-Learning 履修者に対する学習指導状況がリアルタイムに近い形で把握でき、e-Learning においても、対面授業と同じかそれ以上のきめ細かい学習指導を実現した。

本取組の実施にあたっては、平成16年度に「情報システム室」「ラーニングリソースラボ」「管理企画室」からなる「メディア情報センター」を設置した。「情報システム室」では、本取組を実現するために当たっての情報環境を整備すると共に、極めて重要な教育支援システムである SRMS(学生カルテ)及び授業評価システムを開発・運用した。「ラーニングリソースラボ」は、主に e-Learning 教材の開発・蓄積・運用及び開発支援を行った。また、e-Learning 教材の開発には学生スタッフを雇用した。「管理企画室」は、本学取組の広報宣伝の役割を担い、各種パンフレット作成、イベント開催、地域住民はじめ一般社会人に対する e-Learning の窓口を担当した。

本取組を通して、正規開講科目のうち 45 科目の e-Learning 化を実現した。その中で、VOD 型教材のユニバーサルデザイン化については 16 科目を達成できた。ユニバーサルデザイン化した教材については、障害を抱えた方々の集まりである宗像市内の「パンドラの会」の協力により外部評価を実施した。また、個々の学生の志望や状況に適した教材を柔軟に提示できる LMS として、IT 企業との共同開発によりマルチストーリー対応 LMS を開発した。さらに、学生カルテについては科目毎の学習記録を蓄積・閲覧できるようにするなど改良を加えた。

目的に対する成果、人材養成面での達成度

目標に対する成果、達成度について項目ごとに示す。

e-Learning 教材の改良・開発

カリキュラム開講科目 50 科目の e-Learning 教材の改良・開発に関しては、科目担当教員やメディア情報センタースタッフ及びビデオ撮影編集担当の学生スタッフの熱意と技量によって、45 科目まで達成することができた。5 科目目標より少ないのは、カリキュラム改定に伴う科目消滅や教材の質を重視した結果によるものである。

ビデオ教材のユニバーサルデザイン化

教材のユニバーサルデザイン化は 16 科目達成できた。特にデザインの構成やアクセシビリティなどの点においては実施した外部評価が大いに有効であったと言える。また、その評価により新たな問題点が指摘され、今後の改良点も明らかになった。

教材のマルチストーリー化

外部 IT 企業との共同開発により、マルチストーリー対応 LMS は完成したが、当初予定より開発が遅れ、教材の運用は 1 科目にとどまった。しかし、今後の Web 教材作成や既存 e-Learning 教材の移行、学生カルテとの連携などに大いに期待できるものとなっている。

SRMS(学生カルテ)の運用実績と今後のシステム改良点

カリキュラム開講科目の e-Learning 実施にあたって科目毎の「学修指導」の欄を設け、その記録を義務化したため、その項の登録数は平成 17 年度から急増しており、年間 5,000 件近い登録が行われた。平成 18 年度には 5,000 件を超える登録が行われた。これは e-Learning において個別メンタリング(対面指導)を重要視し、メンタリングの内容をその都度登録することになっているからである。「現代 GP の選定」という「公的評価」が、いかに実践活動を促進するかを物語っている。また、学生カルテの情報を基に学生個々の適性を的確に掴んだ進路支援(就職・編入)を行った結果、以下のような決定率をあげることができた。

	就職決定率	編入決定率	進路決定率
平成 17 年度	94%	95%	83%
平成 18 年度	88%	100%	84%

今後、完成度向上を目指すとするれば、現在別システムで稼働している成績などに関する情報も組み込み、学生指導に関する情報をすべて一元化することである。その実現のためには、セキュリティや責任分界点などの問題をクリアしなければならない。

e-Learning 科目開講及び履修状況

e-Learning 履修者数は平成 17 年度延 241 名、平成 18 年度延 309 名となっており、順調に伸びている。科目によるバラツキはあるものの、多くの学生が何らかの科目で e-Learning を履修しており、学生間にも e-Learning を活用することの有効性が十分浸透してきていると思われる。

自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

本学取組の中核である学生カルテへの書き込み情報を見てみると、e-Learning 科目におけるメンタリング以外の書き込みも平成 17 年度以降急増しており、履修指導、生活指導、進路指導などあらゆる指導の場面で、個別教育の推進に向けて学生カルテを有効活用することのメリットについて全教職員が気付き始めていると言える。

広報活動では、近隣の都市圏である福岡市、北九州市でイベント開催、本学での GP フォーラム開催、学会での発表などを行った。いずれの場でも、学生カルテの有効性と運用状況についての質問が大半を占めており、e-Learning 教材開発よりも教育の質向上に向けた手法への関心の高さが伺えた。

また、地域住民あるいは高校教員・生徒については、パンフレット作成・配布、e-Learning デモ体験、近隣高校への説明などを実施し、学生カルテを活用した教育の質向上には高い評価を得ることができたが、e-Learning そのものについては関心が低く、十分な理解を得るには至っていない。

さらに、本取組の終了時には報告書を作成した。報告書については、関係大学などに 300 部程度配布して本取組の周知を図った。

学生等の評価

本学においては、各 Semester 終了後に行う書面による授業評価アンケートのほか、Web から授業への意見や感想、評価などを記入できる仕組み（リアルタイム授業評価システム）を運用している。例えば、授業に対する総合的評価について、e-Learning によるものと通常の一斉講義のものとのほぼ同等の評価（5 段階評価で「大変良い」・「良い」を合わせた構成比を比較）が得られるなど、これらの結果からは、e-Learning 教材の内容とその授業運用について、概ね高い評価が得られていることがうかがえる。特に自由記述や口頭での意見聴取において、個別指導の内容や対応状況に高い評価が得られている。これは、学生カルテの運用によって、膨大な情報から学生個人に関するデータを探索・集約することが容易になったことから、迅速で効果的な個別対応が可能になったことも大きい。

また、本学は学生の出身高校に対して、教職員が定期的に訪問を行い、学生の近況状況などを報告している。その際に、本学の取組の根幹である学生カルテを中核とした個別指導についても言及しているが、実質的な意味のある個別指導の体制であるとして総じて高い評価を得ている。

一方、個人情報保護法（および JIS Q 15001）に関連し、学生カルテの運用について、アクセス制御の適切な適用だけでなく、厳密な運用プロセスを定義すべきといった意見もあった。

学外からの評価

平成 17 年度から平成 18 年度にかけて、本学の取組を広く地域社会に広報することとともに、各教育機関・関連団体との情報・意見交換のために、都合 3 回にわたってイベント（現代 GP フォーラム等）を開催した。延べ参加者数は 328 人に上ったほか、地元新聞社等による取材もなされた。

これらに対する反応としては概ね好意的であり、特に学生カルテの運用と全学一体となった組織体制などについて多くの質問が寄せられた。ただし、一般参加者（高校教員を含む）の反応からは、e-Learning の利点や問題点について、広く理解されるには至っていないことが感じられた。

また、e-Learning 教材のユニバーサルデザイン化の取組に関連して、地域の障害者支援団体と連携を取り、教材デザインや構成についてのアンケート聴取などを実施した。結果、教材内容だけでなく、e-Learning という形態そのものについての評価をいただけたほか、このような共同開発の取組自体についても好感触を得た。

取組支援期間終了後の展開

2 年間の取組を通して、e-Learning 教材の拡充、ユニバーサルデザイン化、マルチストーリー対応 LMS の開発、学生カルテの改良を実現し、「学びの自由化と個別教育」の具現化に向けて一定の成果をあげることができた。

今後について、教材作成の面では e-Learning 教材の更なる拡充を目指すとともに、資格や学習分野に特化した教材作成を行い、特色あるコンテンツ群の形成を目指すとともに、これらを地域社会に還元

し、生涯教育に新しい学びの形を提供できればと考えている。また、他大学との提携により、教材の相互活用など「学びの自由化」の拡大化を推進したいと考えている。さらに、現時点では取組の中核となる学生カルテ、マルチストーリー対応 LMS、あるいは成績管理システム等がそれぞれ独立しており、学生カルテに蓄積されているデータは主観的データのみとなっているが、これらのシステムを統合することで、定量的データも含めた指導が可能となり、教育の質向上に向けた更なる充実を目指す。

本件お問合せ先 メディア情報センター 0940-33-1177
